

探究としてのモラル — 戸坂潤の道徳理論

丸山徳次（龍谷大学名誉教授）

「新しい戦前」という言葉が語られ始めている現在、戸坂潤について考えることには、格別の意義があるように思う。一九四五年八月九日、長野刑務所にて四五年に満たない生涯を終えた戸坂にとって、すでにその数年前に一切の活動が不可能になっていた。余りにも短い哲学的生命のなかで戸坂は、空間論の研究を通して抽出された「性格」概念を方法的基盤とする批判理論を構築し、〈日常性の原理に基づく批評としての哲学〉として最もよく性格づけられる哲学を展開し、膨大な量の評論を残した。

岡邦雄との共著『道徳論』の前半「道徳の観念」を執筆した戸坂は、道徳の通俗常識的観念を批判吟味し、さらに倫理的観念・社会科学的観念を検討する。領域道徳主義・善悪道徳主義・徳目主義（道徳律主義）・不変性神聖性の確信といったことが通俗常識的な道徳観念である。倫理的観念は、近代イギリスを中心に興隆した道徳科学・道徳哲学としての倫理学(Ethics)に代表されるものであり、今日の通俗常識的な道徳観念に影響を与えてもいるが、同時に、非歴史的であることによって普遍性を見せかけるなど、常識的な道徳観念の「多少理論的な釈明」に過ぎない。倫理学が主観の道徳感情・道徳意識に伴う価値感に道徳の存立を認めるのに対して、それによって忘失される社会的強制という常識的側面に注視するのが道徳の社会科学的観念である。道徳は一つのイデオロギーとして社会規範として説明され、そこから道徳の発生・変遷・消滅等の歴史的変化が結論される。こうして社会科学的な道徳観念により、道徳の不変性・絶対性は批判超克され、一領域としての道徳の世界は終焉させられるだろう。しかし、社会科学的な道徳観念もがなお前提にしている領域道徳の観念を打破する、常識のもう一つ別の面がある。既成の所与の道徳に拘泥しないこと、そういう拘泥を脱却するだけの「見識」を持つこと、それこそが「道徳的」だと考える常識である。「常識のある常識は、世間の道徳や人格商売屋や倫理学者達などが道徳を感じない処にこそ、却って自由な生きた闊達な道徳を発見する」。こうした「広汎な含蓄のある道徳の観念」は、これまで「文化的自由」とか「ヒューマニティー」とか呼ばれてきたものだが、戸坂自身は、当時の文学者たちの間で流行していた「モラル」の語を積極的に選び、それを「道徳の文学的観念」と呼ぶのである。

ところが多くの文学者の場合、モラルは幸福の形式主義に墮して、個人身辺的な無定形な生活感情といったものにとどまっている。ここに社会科学的探究と認識の必要性がある。しかし社会科学が問題にする個人は「一般的な個人」であって、他人の自分と取り換えることのできない自分の「自分」ではない。戸坂はここに、想像力の機能の重要性を見る。科学的概念に様々なニュアンスと弾力性を与えて「個人」と「自分」との断絶を飛躍する自由を得た、象徴的な性質を持たされた科学的概念は、「文学的表象」となっている。文学的表象への飛躍拡大によって科学的概念は「モーラライズされ道徳化されヒューマナイズされ」、それによって「一身化され自分というものの身につき、官能化され感覚化される」と戸坂はいう。モラルとは「自分一身上の問題」である。勿論、それは個人道徳ということではない。モラルはいつでも社会的モラルである。モラルが社会科学的認識とまったく関係なしに内にこもって「独善的な逃避的な貧弱な幸福」に墮するものは、「文学主義」と呼ばれる。自由主義が明治以来の日本の社会常識の基調をなしていながら、文学主義に流れる弱点を克服できずに、抵抗の力になり得なかったことを、戸坂は批判するのである。